

おいでん・さんそんSHOW

8月号
21.08.01発行

特集 | 第10期豊森なりわい塾が公募の塾生20名でスタート コロナ後の社会を山村で考える



令和2年度は開催が見送られたために入塾式当日は関係者の喜びもひとしおだった

山村地域に持続可能性の本質がある

太田 稔彦 豊田市長は塾生に
「おねがいして」とい
う言葉を用いて、豊田市は都市と山村との共生とい
うテーマを持つとしている。これが
今の時代、もっと便利に、もっと
豊かにと追い求め続けるのは
ありえない。持続可能性やスマ



トライフを考えるのなら、むしろ豊田市の山村地域の暮らしに本質があるのではないか、と私は思い続けている。中国等では都市と山村とは300～400km離れているが、豊田市ではせいぜい30～40kmで桁が違う。その中で都市と山村とを分けて考える意味がどうあるだろうか。山村に専心を持つ塾生皆さんにとって、暮らしの選択肢は日本全国にたくさんあるが、孤立した山村なのか、都市とのアクセスも可能な山村なのか。私は絶対に豊田市をお勧めしたい。豊森で地域の方の生の声を聞きとつて、どうぞ皆さんのライフスタイルを実現する場として選択をしてみてはいかがでしょうか。住民票はいつでも受け付けます(笑)」と語りました。

入塾式で挨拶する太田市長

こんなにちは!
あなたが地区的
山村地域在住職員です!

イベント情報

【9/4受付開始】おいでんトレイル足助橋本 MTBスキルアップチャレンジ 2021

このプログラムは豊田市柄本町地内の里山にある、おいでんトレイル足助柄本が整備しているマウンテンバイク(MTB)用トレイルやキッズフィールドを、マウンテンバイク(MTB)で遊び尽くすというものです。

MTB用トレイルとは、MTBで走行することを前提に整備された林道。今回のプログラムで走行するトレイルは初心者向けです。経験によっては5歳児でも走行できる全長約500mの緩い下り基調のコースなので、初めてオフロードを走る方でも安心です。

希望者は初心者向けトレイルよりも難易度の高い中級者向けトレイルも走行していただけます。キッズフィールドは、キックバイクなどの自転車に乗る前の子どもでも楽しめるよう整備している遊び場です。

第3回 稲武支所

井上 紳さん



医療系商社の営業、社内システム管理、CAE解析職を経験。その後、企業の社会貢献事業要員として石川県へリターン。ジビ工解体処理施設の立上げに携わり、新米ハンターとして活動していました。

しかし怪我で職を失いどん底の状況で山村地区在住職員の募集に出会い、採用され、職場から徒步2分半の空き家に住み着きました。同期の山村地域在住職員の中で一番優秀かどうかは甚だ疑問ですが、山村暮らしを一番楽しんでいるのは間違いない私です。

まずは職場を含めた地域が自分に対して何を求めているのか?に真摯に向き合い、それに対して自分ができる事を一つずつ増やして、取り組んでいきたいです。

プロフィール

愛知県日進市出身。昭和62年生まれの34歳。趣味は釣り、キャンプ、狩猟など、アウトドア全般です。コロナ禍が終息したら、住んでいる家を飲み家(屋ではなく家)にして溜まり場にしようと画策中です。



トヨタ産業技術記念館館長の大洞和彦さんは、トヨタ自動車(株)が、里山の再生や循環型社会の活動をしている講師を招いていたこと、その社会貢献活動が豊森のルーツになったことにについて説明しました。

また、「豊森は地域に入る作法や暮らしを作ることを大切にしている。地域に多様な人が関わることで、変化が起きる。どうぞ今日から積極的に関わっていいでほしい」と激励しました。

多様な人材が変化を起^{こす}

講座に向けた意気込みをいきいきと語りました。



塾生代表の岡田ゆりさん

第10期塾生を代表し最年少の岡田ゆりさんは、「学生時代から様々な活動に取り組んできたが、「ロナ禍で交流が減りわくわくが足りないと感じている。募集説明会で卒塾生が山村地域へ移住したり、みつばちのワーケシヨップを開催したり、楽しに自分のフィールドを広げている話を聞いた。私も講座を通して多様な皆さんと関わり、自分らしい生き方やキャリアを考え、次の行動につなげていけるよう楽しんで学んでいきたい」と



フィールドワークでの経験をグループで話し合った

ループ毎に発表を行いました。同じ景色でも、人によって見る視点が違うこと。同じ山村地域といわれる下山地区と足助地区でも、歴史的な背景や文化が違うこと。実際に自分の五感で感じた地域と、訪れていない地域とでは、関心度が変わってくることなど、地域に入ったからこそ得られた学びが共有されました。

第1回講座のまとめとして駒宮さんのレクチャー『いまなぜ地域か』グローバリゼーションによる社会問題や、持続可能な地域を同時に解決したこと、自治が重要ということに気付いた、「具体的にどんな自治を行うことが解説策になるのか、多様性

とが解決策になるのか、多様性

REPORT



小原地区大平町で空き家荷物持ち帰り＆片付けイベント実施 小原 おばら

地域住民15名、応募者15名の総勢30名がわずか2時間できれいに

小原地区大平町で、7月24日(土)には空き家の荷物持ち帰りイベント。25日(日)には残された家財を一気に片付ける、空き家片付けが行われました。

主催は大平自治区若者定住促進委員会・小原地区定住促進委員会です。空き家片付けには地域の方が15名、おいでん・さんそんセンターのイベント告知で応募くださった方が15名。総勢30名が参加しました。

大平町は今回で3軒目の空き家片付けとなり、地域の方も随分手慣れています。比較的手頃なサイズのお宅だったこともあり、なんと2時間ほどできれいに片付いてしまいました。



総勢30名が参加した



可燃ごみだけで約300袋も出た



2時間で家屋の中はスッキリきれいに

それでも出た荷物は、燃やすゴミ約300袋、埋めるゴミ約30袋、ダンボール軽トラ一杯、金属ゴミ軽トラ一杯、粗大ごみたくさん、袋に入らない大きな燃やすゴミたくさんなど。

やはり一軒の家の荷物を片付けるというのは並大抵のことではありません。昼食は大平白山神社の境内にて、地元の飲食店さんのお弁当を参加者一同でいただきました。

今回片付けた空き家は、今後、空き家情報バンクに登録されます。街道沿いの便利な立地です。素敵に利用がされるといいですね!

(小黒敦子)

受け入れる地域が持続可能なのか学んでいきたいとの感想が多く聞かれました。
2日間の講座を通し、塾生の皆さんは豊田市や山村地域への視点、羽布町と五反田町のフィールドワークによる感覚、そして1年間を共に学ぶ仲間を得られました。1年間で生まれた「何か」に、心から期待しています!(松本真実)

足助地区五反田町と下山地区羽布町とのフィールドワークへ行きました。地域の皆さんにご案内いただき、実際に「あるく・みる・きく」ことで、集落の地形や成り立ち、農的暮らしの営みが続いた押井町について学んだことで、持続可能な暮らしを考えるきっかけとなっていました。たのではないでしょうか。

次に、滝澤寿一豊森実行委員長が、東京からオンラインでレポートで話したことをグ

マタギ(山間に暮らす狩人)が語った「山は狩猟の場でもあり、山野草を食料にしたり薬にしたりして、山さえあれば生きていけた」、「語り手を通して考えさせられた」、「これまで言語化できることの違いについて考えさせられた」という言葉が紹介されました。

午後からは今期お世話になる塾生からは「生きるために働くことの違いについて考えさせられた」、「これまで言語化できることの違いについて考えさせられた」という感想が聞かれました。

午後からは今期お世話になる塾生からは「生きるために働くことの違いについて考えさせられた」、「これまで言語化できることの違いについて考えさせられた」という感想が聞かれました。

午後からは今期お世話になる塾生からは「生きるために働くことの違いについて考えさせられた」、「これまで言語化できることの違いについて考えさせられた」という感想が聞かれました。

足助地区五反田町(左)と下山地区羽布町(右)でのフィールドワークの様子

